

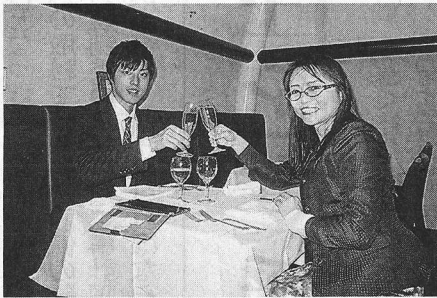
東日本大震災当日まで、私の経営している福島県南相馬の学習塾には約百十人の生徒が通っていました。原発事故でゼロになりました。生徒の一人である孝太は、高校三年に間もなく進級するという時に被災しました。海沿いにあった孝太の自宅は流失。戻る家もなかったのに「仲間と一緒に高校を卒業したい。番

# 東北復興日記



▶▶ 179

まだまだ



ベテランママの会代表  
番場さち子さん



## 戻った教え子旅立ちの春

場先生に大学に入れてもらいたい」と避難先から戻って来てくれたのです。私は、受験生なのになぜ戻って来たのかと、とがめたことを恥じました。それからマンツーマンで過ごした日々を忘れられませんでした。

孝太は優しくて素直な青年に育ちました。お母さんの誕生日には、よくお母さんが聴いているというラジオ番組に、メッセージとともにお母さんの好きな曲をリクエストする、そんな青年です。

「孝太のことはさち子先生が半分育ててくださったと思

う」とのお父さんのお言葉が、私への表彰状のように思えます。小学校四年生から彼の人生に関わらせてもらったことを私は誇りに思います。

テレビの取材で、私には言えなかった言葉を、後日、放映された番組で知りました。

「自分が帰って来たことで、番場先生の人生を変えてしまったのではないか」と気にしていたのです。孝太の思いを知り、私は泣きました。私がいまだにこうして「先生」と呼ばれているのは、孝太が帰って来てくれたからに違いありません。

あれから五年。大学を無事卒業し、今春からサラリーマンデビューです。神奈川で働くことになりました。先日、

誕生日と就職祝いを二人で乾杯。写真。した際、今も仮設住宅に暮らす両親に近い将来、呼び寄せて一緒に暮らすという計画も力強く語ってくれました。何で帰って来たの、ととがめるような言い方をしたくせに、私は孝太がこれでもう南相馬に帰らないことを少し寂しい思っています。皆がそれぞれの道で幸せになっ

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。